

聖徳太子の謎と法隆寺修学旅行ツアー

忌部 守

1 空白の622年

聖徳太子が亡くなった年は、『日本書紀』によれば621年(推古二十九年)の二月のことと記述されているが、実際には622年(推古三十年)の二月に起きている。ちょうど、一年のズレがあるのだが、なぜそれが判るかという点、法隆寺金堂の釈迦三尊像の光背にハッキリと刻まれているからである。正式の国史である『日本書紀』では、時として為政者の都合により事実が曲げられるが、仏像の光背銘にはありのまま書かれることがある。当事者は事実を刻み、為政者はそれに気付かなかったため幸運にも幾多の火災を逃れてそのまま残ったのである。

さらに、光背銘には太子の死の二か月前に母親である穴穂部間人(あなほべのはしひと)太后が死に、太子の死の前日に妻の膳(かしわで)妃が死んだと書かれている。三人がほぼ同時期にである。尋常ではない。あたかもそれを隠すかのように、『日本書紀』は太子の死を前年に起きたこととし、さらに当該年の622年の一年分の記事を削除した。もちろん、母と妃の死の事実についても『日本書紀』では触れられていない。(推古朝は三十六年間続いたが、記事が全くないのは622年だけである)

同じような事例は他にもある。薬師寺東塔檨銘である。『日本書紀』は、薬師寺の発願を天武九年(680)のことと記すが、東塔の檨銘には天武八年のこととある。やはり一年の差があるが、これは壬申の乱が起きた年を『日本書紀』は天武元年(672)と記述するからで、実際にはその年は秋まで大友皇子が健在であったはずで、弘文元年であったろう。しかし、天武天皇が弘文天皇(大友皇子)から政権を篡奪したことを隠さなければならない。つまり、大友皇子は即位していなかったことにするのだ。だから齟齬が起きる。

それでは、太子の死因は病死か、自殺か、あるいは他殺か？事件性はあるのか。釈迦像の光背銘によれば、状況はこうだ。まず、621年(推古二十九年)の十二月に母親の太后が亡くなる。そして、年が明けた622年(推古三十年)の正月二十二日には太子が病により床に臥すが、妻である妃が「労疾」で並んで床に就く。すると、王子や諸臣らが、「深く愁毒をいだ(懐)き」発願して等身大の釈迦像を造った。しかし、二月二十一日に妃が亡くなり、翌日太子が死んだ。そして、三月中に、釈迦像が完成したという(*1)。

ここで、気になるのは「深く愁毒をいだ(懐)き」の部分だが、原文を示すとこうなる。

「深懷愁毒 共相發願 仰依三宝 当造釈像尺寸玉身」

「愁毒」とは嘆き悲しむという意味になるが、通常であれば「愁傷」「愁痛」や「愁殺」などが熟語として使われるが、「愁毒」という用例はあまりない。「愁殺」があえて「愁毒」に替えられた感もある。そこで、「愁毒」を熟語ではなく、返り点を変えて「深くおも(懐)い、毒をうれ(愁)いて」と読んだらどうだろうか。「毒」は、毒物であり、健康や精神に有害な事物を指す言葉である。

この光背銘は、なぜこの釈迦三尊像を造像したかという、いわば縁起を書いているものだが、縁起には誇張があることもあり、縁起がすべて正しいと考えることは出来ない。しかし、この縁起の内容は、太子が病気で妃と共に病床に就き、王子らが発願して太子の回復を祈って等身大の釈迦像を造ったとある。太子は深く仏教に帰依していたのであるから、これらの行為には納得性はある。さらに、この釈迦像の様式は古式を残しており、太子と同時代のもの、あるいは死後に造られたとしてもそれ程後のものとは考えられない。銘文は、直接光背裏に彫られており、法隆寺は度々の火災にあっているはずであるが、それを潜り抜けたと考えてもおかしくはない。もちろん、この光背銘だけでは太子の死因は断定できない。

問題は、『日本書紀』では太子の死の時期が変えられていること、同時に母親と妻が死んでいることが隠蔽されている事などを勘案すると、毒殺の可能性も捨てきれない。それでは、聖人のような太子が暗殺されるような要因が当時あっただろうか。

その理由は、次節で詳しく述べるとして、ここではなぜ、622年の記事がすべて抹消されたのか考えてみたい。実は、その年は日本を含む東アジアでは激動の年であった。六世紀末に近い589年(崇峻二年)、中国の隋が南朝の陳を滅ぼして漢代以来の中国統一を果たすと、俄かに地続きの朝鮮半島が騒がしくなる。高句麗も百済も、南朝の陳にも朝貢していたので、その陳が滅亡し隋が強大になる事は大きな不安になったに違いない。軍事的な圧力を恐れた高句麗は防備を整え、一方隋は高句麗を叱責する書簡を送りつけるなど両国の緊張が高まったが、遂に598年(推古六年)に高句麗が中国領の遼西に侵入したことを機に、隋の文帝は水陸三十万の大軍による大遠征を行なった。この遠征は、隋側に食糧の不足や疫病の流行があり、高句麗王が謝罪の使者を隋に送ったため、遠征は中止され高句麗による隋への朝貢が再開された。

この隋と高句麗の衝突は、倭国にとって決して対岸の火事ではない。隋の大遠征の直前の595年(推古三年)に、高句麗は倭国に僧の慧慈を派遣(渡来)し、太子の顧問にしている。倭国を高句麗側に取り込もうとしたのだ。二回の遣隋使派遣も高句麗の仕業だったかもし

れない(*2)。五世紀の倭の五王以降、中国には使者を派遣しておらず久々の復活であったからである。

この隋と高句麗の衝突は慧慈から逐一、太子に報告されていたと考えられる。慧慈は、太子の仏教の師と伝えられているが、同時に当時の僧は、官僚や学者でもあったと考えて間違いない。仏教は、当時の最新科学であった。『日本書紀』には記載がないが、600年(推古八年)に『隋書』には第一回の遣隋使、実際には朝貢使が倭国から隋に派遣されたのは、やはり慧慈や百済によるアドバイスであったろう。なお、慧慈は太子の死を聞いて、翌年の二月に自身も死んで浄土で再会すると言いついて残して、翌年にその通りに死んだという『日本書紀』のエピソードは史実ではなく、太子が実は翌年の622年に死んだという事実を暗示していると考えられる。『日本書紀』は史実を書き換えた時に、それを暗示する逸話をそれとなく記載するというのが定番である。

倭国が、第二回の遣隋使を派遣した607年(推古十五年)、隋の二代目皇帝の煬帝が北方の突厥王の元を訪れた際に高句麗の使節と鉢合わせになるという事件が起こり、高句麗が突厥にも使者を送り、通交していることが明るみになった。結果、煬帝は612年、613年、614年と三回に亘って高句麗への遠征を行なったが、隋の国内で反乱が起きたこともあり、遠征は失敗し混乱の中で隋王朝そのものが崩壊した。

さて、隋に代わって618年(推古二十六年)に唐が建国したが、翌619年(推古二十七年)に早くも、高句麗が遣使したのを始めとして、621年(推古二十九年)に唐が中国を統一すると、百済と新羅も使者を送った。そして、問題の622年(推古三十年)を迎える事になる。史料がないので、実際に622年に何が起きたのかを把握することはできないが、少なくとも次の二点が起きたと考えることが出来る。

第一に、既に述べた通り、聖徳太子が二月に暗殺された可能性がある。その結果、国内の政治バランスが崩れ、政治状況が大きく変わったと推定される。隋が中国を統一すると直ぐに遣隋使が派遣されたが、今回の唐の統一には630年(舒明二年)まで遣唐使派遣は実施されていない。国外に対する目配りは無くなり、蘇我馬子を中心とする内向きの蘇我氏の一極体制になったのではないだろうか。

第二に、太子の死後、僧慧慈は死んだのではなく、隋との衝突が決着した後の615年(推古二十三)に高句麗に帰国している。高句麗は隋による度重なる遠征を押し返したとはいえ、一時的には衰弱したであろう。中国や朝鮮諸国から倭国に何か働きかけがあった可能性も残る。そして重要なことは、この後は倭国の外交は百済重視政策を強め、663年(天智二

年)の白村江の敗戦まで一挙に突き進む事になる。

2 復活の720年

現在の法隆寺が誰によって建てられたかと問われれば、多くの人は聖徳太子と答えるだろう。でも、それは違う。法隆寺が再建された時、既に太子は死んでいた。そして、法隆寺が再建された時、実は一度死んだ聖徳太子は復活したのだ。

何やらキリストのような話になってしまったが、法隆寺に関する再建・非再建論争については決着して久しい。現在の法隆寺は、聖徳太子が建立した法隆寺そのものである、と当初は考えられていた。なぜなら、現在の法隆寺の伽藍は、飛鳥様式に則った古式のものではないか、と考えられても可笑しくはない。

事の発端は、明治二十年頃、『日本書紀』の記事の見直しから始まった。記事には、天智九年(670)に法隆寺がある日の夜半に焼け、一堂も残っていないと書かれている。文字通り読めば、法隆寺は七世紀後半に全焼したのであり、現在、法隆寺が建っているとすれば、それは再建されたということになる。この問題について、一方では美術様式的に法隆寺は飛鳥時代の遺構にみられるから、実際に火災したのは法隆寺とは別の建物ではないか、などの反論がなされた。しかし、この様な美術様式や文献論議だけでは到底決着が付かない。

大正時代になって、現五重塔の中から、唐時代の葡萄鏡が発見されたり、法隆寺食堂や普門院の辺りから古瓦が散見されていることが注意を引いた。そして、いよいよ昭和十四年になって、若草伽藍の発掘調査が開始されて再建論が優勢となった。

発掘場所は、五重塔や金堂のある西院伽藍から、夢殿の東院伽藍へ向かう道筋沿いの東大門手前がある普門院の築地塀の内側(南方面)であって、現在も塀に遮られて見えない場所である。この若草伽藍では、五重塔基壇と金堂基壇が発見されたのであるが、重要なことは、その伽藍配置が南に五重塔を置き、その北側に金堂を配置するという四天王寺式伽藍配置であったことである。現法隆寺は、西に五重塔、東に金堂と並列配置する方式だが、飛鳥時代には仏舎利のある塔を中心とする四天王寺伽藍方式が主流であって、法隆寺もやはり四天王寺式であったことが確認されたのである。これは大きな成果だ。法隆寺建築は飛鳥様式に見えるが、実は純粋な飛鳥様式ではないことが判明したのだ。

ここで様式について触れておくと、(諸説あるが)まず北側の講堂が回廊の中に取り込まれるのは鎌倉時代だ。そこで延長された回廊も虹梁の上の叉首の中央に束を使用するなど飛鳥様式ではない。金堂は重層の入母屋造の本瓦葺で、軒下に雲肘木や高欄に卍崩しの彫り

物・人形束などの飛鳥様式を持つ一方、一階部分の外回りに裳階が利用されているなど奈良様式も含む。つまり、現在の法隆寺は聖徳太子を偲ぶため飛鳥様式を残す一方、その後の様式も併せて持つ複合様式ということになる(*3)。

では、現在の法隆寺は、聖徳太子の死後、一体何時、誰によって再建されたのかを考える必要があるが、その前に前節で述べたように、聖徳太子が暗殺される理由について明確にして置きたい。それは、よく知られている斑鳩宮の造営自体にあると考えられる。

『日本書紀』によれば、推古天皇が即位した年の九年後(601)、聖徳太子は「初めて宮室を斑鳩に興てたまう」と簡単に記述されている。もちろん、法隆寺が現在建っている地であることは言うまでもない。『日本書紀』には、宮建設の理由も経緯も一切書かれていないが、この斑鳩の宮について、聖徳太子が大阪を繋ぐ交通至便にある斑鳩の地に皇太子宮を建てたものとされ、遣隋使の一行に飛鳥の都に着くまでの途中に、日本にも壮大な寺院があることを見せつけようとしたのではないか、などと一般に説明されている。

しかし、よく考えて欲しい。

斑鳩の宮から推古天皇のいる飛鳥の都まで、直線距離で二十キロほど離れており、その後建設された藤原京と飛鳥の都の間の距離三〜四キロとは訳が違う。大和川に行きかう船を利用したとしても、半日以上は掛かってしまう。法隆寺の建設だけならまだしも、太子は自分の宮も建設して常住し(住み始めたのは605年)、一族の者を住まわせているのである。推古天皇が朝に太子を呼んでも、到着には夕方位まで掛かってしまう。太子は、推古天皇の飛鳥よりも壮大な都と寺院を斑鳩に作ろうとしたのである。これを、単なる皇太子宮(東宮)と考えてよいだろうか。

女帝である推古天皇が即位して早十年になろうとしており、太子も国家事業となる第一回の遣隋使を派遣して自信に満ちた時期であったろう。この斑鳩の宮の規模、建設時期、都からの距離は、周りの人間から見ても皇太子の行為としては異常に見えたに違いない。筆者は、太子は天皇になろうとしたと考えている。

聖徳太子が天皇になった形跡はない。しかし、太子は天皇になろうとして暗殺されたと考えられる。当時の太子の周りの状況を見て欲しい。まず、推古天皇は、崇峻天皇が暗殺された後、聖徳太子はまだ若く、つなぎの女帝となったと考えられる。それから十年経って、太子が即位しても可笑しくはない。しかし、推古天皇は即位後の行動からも、夫である敏達天皇との間に生まれた自分の皇子たち、つまり竹田皇子と尾張皇子に後を継がせたいと考えていた。それまでは、天皇位は離さない。竹田皇子は若くして死んだが、尾張皇子について

は『日本書紀』に詳しい記述はないものの、尾張皇子の娘である位奈部橘王が太子の妃になっているので、夭折はしていないことが確認できる。即位して十年、太子が斑鳩に自分の宮と壮大な寺院を建設したとなれば、その意図を訝ったのではないか。

一方、大臣蘇我馬子はどうか。馬子を始めとして蘇我氏が百済系の渡来人を積極活用していたことは有名な話であり、日本最初の本格的寺院飛鳥寺の建設に際しても百済に支援を要請している親百済派の政治家である。太子が、高句麗僧・慧慈を顧問にして遣隋使を主導することには快く思っていなかったのではないか。高句麗と百済は敵対関係にあった。馬子は、天皇位に既についていた崇峻ですら殺害している。

推古天皇であれ、蘇我馬子であれ、あるいはそれ以外の第三者であれ、聖徳太子を殺害する理由も権力も持っていた。太子が、斑鳩の宮を建設してから622年までの間に危機があったと考えられる。

3 「聖徳太子≠聖人君子」の理由

『日本書紀』によれば、聖徳太子は生まれながらにして言葉を喋り、一度に十人の訴えを聴いて理解出来たとか、超人、聖人であった様な記述がされているが、これは太子の死後、太子信仰の対象として祀られるようになってからのことである。それ以外の『日本書紀』の記述を追いかけると、父である用明天皇の死の直後、馬子が起こした対物部氏との戦いにおいても太子自ら参加したり、推古天皇の治世になってからも二回に渡る新羅征討軍を計画するなど、むしろ好戦的な性格を現している。

法隆寺は何時、再建されたであろうか。再建時期については、様々な議論がなされているが、『法隆寺資材帳』には和銅四年に中門仁王像が造頭とあるのを受けて、石田茂作氏は再建の上限を天武朝の中頃、下限を元明朝の和銅年間(708～714年)としている(*4)。

次に、誰が法隆寺を再建したであろうか。そのカギとなるのが、西院伽藍の西北の丘の上に立つ西円堂である。この西円堂を建てたのは橘三千代であるが、娘の光明皇后が病氣平癒の祈願のために造営したとも考えられている。さらには、法隆寺に三千代の持仏である橘夫人厨子が伝承されていることは有名である(*5)。この両者に関係する権力者とさえ、藤原不比等という事になる。つまり、『日本書紀』(720年完成)において、聖徳太子聖人像を創り上げた不比等が、法隆寺再建の中心的立役者であると考えて間違いはない。

聖徳太子は天皇になれず、そして死後は太子信仰が創造され、『日本書紀』により聖人になった。しかし、太子が日本で仏教の興隆を図った英雄であったことは間違いはない。

【註】

- (*1) 東野治之校注『上宮聖徳法王帝説』(岩波文庫)
- (*2) 李成市『古代東アジアの民族と国家』(岩波書店)
- (*3) 妻木靖延『図解ここが見どころ! 古建築』(学芸出版社)
- (*4) 石田茂作『法隆寺雑記帖』(学生社)
- (*5) 東野治之『日本古代史科学』(岩波書店)

(以上、忌部守「聖徳太子=斑鳩復活」論『歴研よこはま』第八十一号)

(○印は、次頁の配置図番号を指す)

《 旧若草伽藍 》

金堂・五重塔⑦ 四天王寺式(南に五重塔・北に金堂)
天智九年(670)に全焼(『日本書紀』)

《 法隆寺伽藍 》

南大門① 永享十年(1438)再建、単層三間(八脚門)
西院伽藍 和銅四年(711)に中門仁王像を造顕(『法隆寺資材帳』)
中門②・回廊③ 重層四間・単廊
平安時代以前は、大講堂・経蔵・鐘楼は回廊の外側
金堂④・五重塔⑤・大講堂⑥ 法隆寺式(西に五重塔・東に金堂)
雲肘木、高欄に卍崩しと人字型の割束(飛鳥様式)
大講堂は正暦元年(990)再建
東大門⑧
東院伽藍
夢殿⑨ 天平二十年(748)聖霊会始行、寛喜二年(1230)に大改造
西円堂⑩ 養老二年(718)建立、建長二年(1250)再建

以上